

現代・和室の会 内田青蔵会長 インタビュー

未来につながる新たな和室の提案を

和室文化の存続、継承のため、今年3月、「現代・和室の会」が設立された。現在、日本の住まいの中で和室の数は急激に減少しているという。日本の伝統文化である和室をどう守り、新たな形で後世につないでいくか。同会の内田青蔵会長に話を聞いた。

―「現代・和室の会」設立の背景には、日本の住宅における和室の減少があります。いつ頃からどのように減少しているのでしょうか。

2000年を境に、和室は急速に減少するどころか、消え去ろうとしています。例えば2017年度の「フラット35住宅仕様実態調査」における「もつとも大きい和室の広さ」の項目をみますと、全国では5割、首都圏では7割の住宅において、和室が無い状況になっています。和室があっても多くが4畳以上6畳未満。壁で仕切られた独立した和室というより、近年多くなっているリビングなどの部屋の一部に畳を敷いた形が広がっていることが伺えます。

また、2019年に発表された、賃

貸集合住宅における和室の有無を調

べた研究があります(注1)。186

件の賃貸アパート、マンションの間

取りを調査したもので、築年数ごと

に和室の有無を分類すると、198

0年代までは7割以上の物件で和室

がみられたものの、90年代で5割強

2000年代以降で1割となり、2

010年代以降は和室のある物件は

ゼロという結果になりました。この

論文では、戦後の住宅の洋風化が進

む中で、応接の役割を担う伝統様式

としての和室、狭小住宅で茶の間や

寝室の役割を担う和室と、2つの役

割で和室が残ってきた一方、畳自体

のメンテナンスの煩雑さや洋室にお

ける床座の浸透により、和室自体が

特に賃貸住宅で顕著に減少しつつあ

る、と指摘しています。



内田青蔵(うちだ・せいぞう)
1953年生まれ。1983年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程満期退学。工学博士。文化女子大学教授、埼玉大学教授、神奈川大学工学部建築学科教授を経て、2023年4月から神奈川大学特任教授。主な著作に「『間取り』で楽しむ住宅読本」(光文社、2005)、「日本の近代住宅」(鹿島出版会、2016)、「住まいの建築史」(創元社、2023)、共著に「和室学」(平凡社、2020)、「和室礼賛」(品文社、2022)など。

―このままですと、和室での生活体験のない人が増えていくように思われます。

日本大学生産工学部建築工学科、亀井靖子准教授による、若者の和室

離れについてまとめた研究がありま

す(注2)。20年から23年にかけて建

築を学ぶ学生に和室に関するアン

ケート調査を行ったもので、和室で

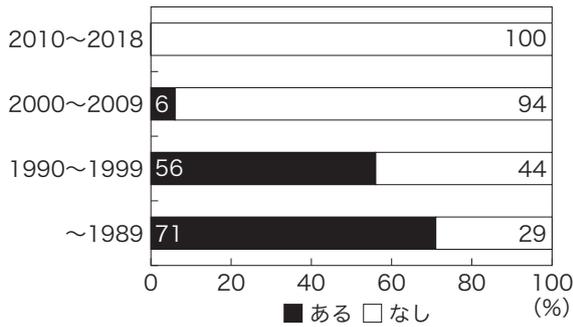
生活した経験の有無で意識がだいぶ

違うことが明らかになっています。

経験がある学生は生活の延長の場と

して捉えています。経験のない学

賃貸住宅186件を年代別にみた和室の設置状況



出典:「賃貸住宅における間取りの変容と和室の有無」(日本建築学会東海支部研究報告集第57号、2019年2月)

生は、和室を「過去」の伝統的なものと考えているため、その使い方が分からない。ですから、自分の住まいに和室を必要としなくなるのは当然です。

私自身も、学生と建築物を見学に行き、感覚の違いに驚いたことがあります。ある空間に入ったとき、「こは大体10畳ぐらい」と言っても、学生は理解できない。平米の数値じゃないと大きさが把握できないのです。日本の建築では、昔から畳の寸法を軸にした「尺」「間」「坪」といった

単位が使われてきました。そういう日本独自のスケール感が崩れて、失われていくのではと危惧しています。若い世代が、和室に目を向けなくなる傾向がこれから強まっていく中で、なんとか和室を見せたり、体験させたりすることで、未来に向けて変わっていきばいいのですが。

ゆとりある人だけの贅沢にしてはいけない

—そうした若者の意識の変化もありますし、和室は旅館や料亭などの贅沢な空間だけに残るようになるのではないのでしょうか。

戦後に吉田五十八らによって近代数寄屋という形式が完成しましたが、料亭などの特別な空間にだけ採用されて、個人の住宅にはうまく取り込めず、継承することができませんでした。今もハレ、非日常的な空間の様式として残っていますが、そうした空間を体験できるのは、経済的にゆとりのある人だけです。和室を日本人の生活文化の延長と考えたとき、ある一定の人たちだけのものになってしまうのは、文化の継承といえるのでしょうか。

—先生ご自身の和室の研究についてもお聞かせください。

私自身は建築史を専門とし、特に近代住宅、日本に洋風文化が入るまでの建築の変化を研究してきました。戦前は西洋的な住宅の中に畳の部屋を組み込んだ、和洋の文化をミックスした住宅スタイルが完成されました。戦後も、様々な建築家たちが工夫して住宅の中に和室を作ってきました。そうした例を見てきたため、様式の変化こそあれ、和室がまさか消えていくとは思っていませんでした。我々研究者たちが、和室があることを当たり前と思い、価値を見直さなのまま放置してきてしまったのではと反省しています。例えば、旧岩崎邸は洋館の方は先に文化財に指定されたため、ほとんど残っていますが、和館は遅れて文化財となり、大広間以外のほとんどが壊れてしまいました。

私個人として、特に戦後の住宅の中で和室のありようを見直さなければいけないと思っています。戦後の建築家たちは和室にどういう意味付けをし、どう苦心して設計していたのか。そこはほとんど研究されてこなかった。なぜ戦後もなお、住宅

に和室、畳が残されたのか。そこを整理することによって、今後の和室の在り方のアイデアが得られるかもしれない。住まいの中に和室がある面白さ、そのヒントを与えられないかと考えています。

住宅メーカーや建築家の新たな提案を期待

—和室文化を継承していくため、会として今後どのような取り組みをされていくのでしょうか。

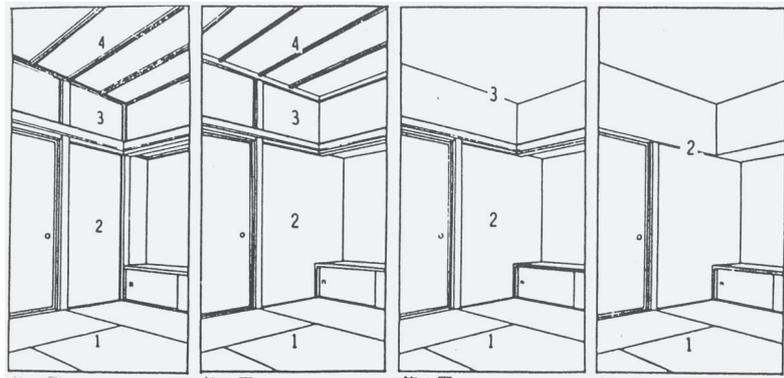
さまざまな活動を考えていますが、1つは教育です。大学にもありますが、実は工学系の建築の学生は大学の授業でほとんど木造の設計をやっていないのです。木造は木工の世界、という意識が強く、建築学科を出て、建築家でありながら木造や和室について知識がないということがよくあります。現在は空き家のストックが増えて、古い建物を改築する機会が多くなっていますが、和室の価値を分からないまま壊れてしまったりする事例ができています。本来なら知識があつて初めて、壊すか生かすかの判断ができるはずですが。建築教育の中で伝統的な建築についての知

注1:松田佳樹、毛利志保「賃貸住宅における間取りの変容と和室の有無」(日本建築学会東海支部研究報告集第57号、2019年2月)

注2:亀井靖子「学生の和室離れと和室文化の継承に関する研究—和室経歴差と和室構成要素による和室像について」(日本大学生産工学部亀井研究室調査)

識を学んでもらうと同時に、木造および和室の設計を大学の課題で扱ってもらおうよう働きかけていきたいと思っています。

もう1つは、住宅メーカーや工務店など住宅業界の方への働きかけで



建築家吉田五十八の明朗性の図(1935年)左が伝統的の和室。右に行くほど簡略化され、モダンでシンプルな和室へと移行していく(提供:内田青蔵氏)

す。先日、某ハウスメーカーの若い設計担当者と話す機会があったのですが、彼らは現在ほとんど和室の設計をしていないそうです。作る側としては、施主の意向に合わせて設計するため、和室が不必要とされれば仕方がないことです。でも、もう一度提供する側が和室の文化を勉強し、使い方を含めて施主にあらためて提案してほしいです。会として、こういう和室を作ると提案するのではなく、むしろ建築家の方々に新しい和室を考えていただきたい。

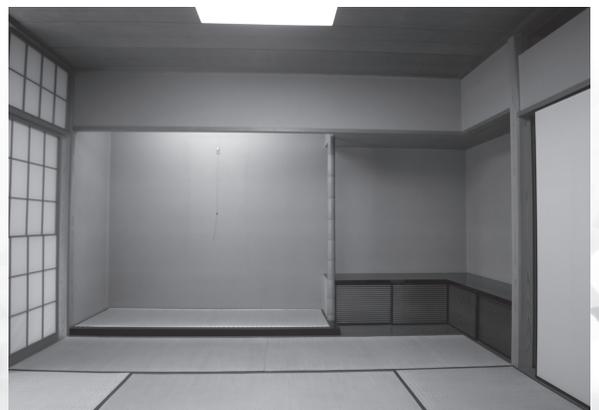
既に完成された和室をただ守るだけでなく、それを基にしながら、現在の材料や技術を取り入れ、変化させていくこともできるのではないのでしょうか。空き家の和室リノベーションを募るのも面白いと思います。—会では和室をユネスコの無形文化遺産として登録することを目標としています。今後どのような取り組みをしていくのでしょうか。

いま、文化庁と相談しながら方策を考えているところです。畳の団体の方々に話をしに行ったり、住宅業

界の方々に協力を求めたり、いま多くの方々に認知していただき、登録に向けた活動を広げている最中です。また、国際的な遺産として考えた場合、他国から見た価値も大事な要素となるようです。例えば、現在台湾や中国では和室を作ることが一部の高級住宅で流行しているそうです。彼らは、どういう意識でどう利用しているのか。そうした他国で作られた和室の事例を今後調査していくことで、我々の知らない和室の魅力を知ることができるとも思っています。

広く一般の方々に和室文化を伝えていく取り組みも行っています。これまでシンポジウムを東京、京都、名古屋で行いましたが、12月には金沢で開催します。伝統和室の見学会も随時予定しています。若い方々に和室の魅力を伝えるとともに、慣れ親しんでいる方々にもその意味をあらためて考えていただく。そういう地道な活動をしばらく続ける必要があると思います。

—畳の上で寝ころがる。そうした気持ちよさには普遍的なものがあるように思います。



吉田五十八設計の岸邸の和室。床の間の両隅の柱は消えている。床脇の棚には暖房設備が内包され、スチール製の建具越しに熱が放出される。畳の縁も細く、モダン(提供:内田青蔵氏)

畳は汎用性が高く、そのままコロンと転がると気持ちがいいし、椅子や机を置いてもいい。現代に合わせて多様な使い方を提案できれば、日本に限らず世界で、自由な空間としてあらためて求められる気がしています。戦後には胡坐をかける椅子など和室に馴染む家具が流行しましたが、その後、ヨーロッパなどから来て普及したシャープな家具に押し流されてしまいました。我々日本人は床での生活が体に馴染んでいます。その生活をうまく処理できる家具が復活してきたら、変化が生まれてくると思います。(聞き手・高場泉穂)